

町の今昔

戦後の川崎は工業都市として栄えました。人口50万人となったのが昭和32年で、この頃は人々の足として市電が走っていました。

昭和47年に政令指定都市になり、翌年、100万人都市となりました。平成31年現在は151万人で、人口は今も増え続けています。

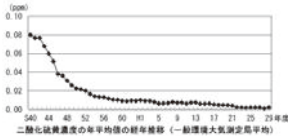
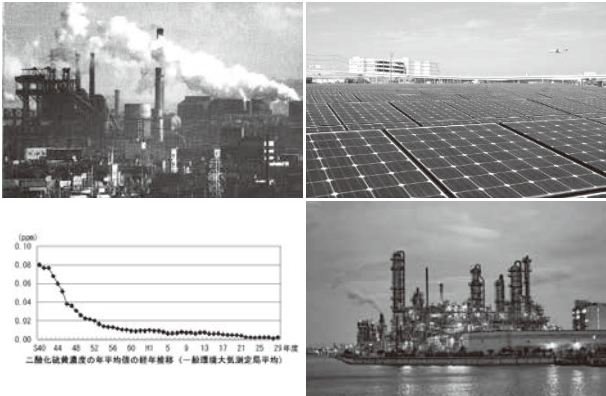
政令市で比較すると、一番平均年齢が若く、出生率・婚姻率が最も高い、とって元気な都市です。また、学術・開発研究機関の従業者の割合も最も高く、「ものづくりのまち」と「研究開発の拠点」という側面を持ち合わせています。

多摩川を挟んで羽田空港と隣接するキングスカイフロントはライフサイエンス・環境分野を中心とした研究開発拠点として、たくさんの研究機関が集積し、日本の成長戦略の一翼を担っています。



市民ミュージアム提供

市民ミュージアム提供



環境の今昔

川崎に立ち並ぶ工場は高度経済成長の日本を支えた一方で、深刻な公害を引き起こしました。公害防止条例（昭和47年）を施行し対策に取り組んだ結果、環境は劇的に改善しています。

近年は温暖化対策にも力を入れており、再生可能エネルギーや水素の活用など、積極的な環境対策を行っています。

昭和の時代には公害の象徴であった工場地帯ですが、現在では工場夜景ツアーが開催され、人気を集めるなど、川崎の新たな観光資源となっています。

ごみの今昔

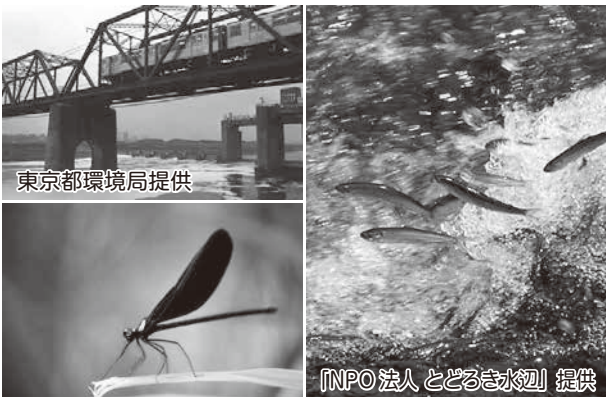
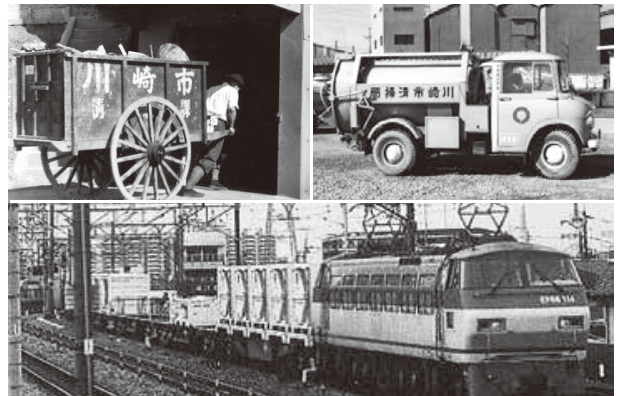
昭和30年に自動車によるごみの収集を日本で初めて、開始しました。それ以前は手押し車で収集をしていました。

バブル景気に沸く平成2年には、増加するごみに処分が追い付かない状況に陥りました。市はこの状況を乗り越えるため、「ごみ非常事態宣言」を行い、様々な対策が行われました。

平成7年には環境に優しいごみの鉄道輸送を日本で初めて開始し、現在に至るまで、日本で唯一の取り組みとして継続しています。

近年は、ごみの減量や分別の徹底に向けた普及啓発として、冊子の配布や出前ごみスクール、分別アプリの配信などを行っています。

地道な取り組みの結果、市民の意識が高まり、一人あたりのごみ排出量は年々減少しています。



東京都環境局提供

「NPO法人とどろき水辺」提供

川崎の今昔、未来

かつて、多摩川をはじめとした市内の川は家庭用洗剤などにより、泡であふれ、水質汚濁が深刻な状況でしたが、下水道の整備などの対策により、水質は大幅に改善しました。近年では、きれいな環境でしか生息できない鮎やハグロトンボなどが戻ってきています。また、国が指定する絶滅危惧種のホトケドジョウの生息も確認されています。

これまで振り返ってきたように、川崎は高度経済成長の裏側で様々な問題を抱えました。しかし、その問題をひとつひとつ乗り越えて、今の環境があります。その経験を大切に、よりよい環境を未来へとつなげていくことが、今を生きる私たちが果たすべき責任なのです。

問い合わせ：環境局環境調整課
TEL：200-2387 FAX：200-3921